

令和4年度第4回国立大学法人埼玉大学経営協議会議事要録

日 時 令和5年1月26日（木）13：30～15：10

場 所 事務局第一会議室及びZoom 併用

出席者 [会議室] 坂井学長、黒川理事、柳澤理事、松田理事、中村理事、市川理事、
佐々木委員、利根委員、平本委員、真下委員、山名委員
[Zoom] 砂川委員

欠席者 小安委員、萩原委員

陪席者 [会議室] 山中監事、齋藤監事、石井理工学研究科長
[Zoom] 市橋副学長、田代副学長、川又副学長、木崎副学長、伊藤副学長、
井口人文社会科学研究科長、野中教養学部長、井原経済学部長、堀田教育学部長、
長澤理学部長、重原工学部長

- 坂井学長から、小安委員及び萩原委員が本会議を欠席する旨報告があった。
- 令和4年度第3回議事要録の確認について（資料1）
令和4年度第3回国立大学法人埼玉大学経営協議会議事要録（案）の確認が行われ、承認された。

※各事項における意見等は次のとおり（☆学外委員、△学内委員等）

○ 審議事項

1 令和5年度予算編成方針について

松田理事から、資料2に基づき、令和5年度予算編成方針について説明があり、審議の結果、承認された。

☆ 電気料金などのインフラコスト上昇については、文部科学省による予算措置は行われるのか。

△ 令和4年度においては、約4,500万円が電気料金分の補填として追加措置があった。令和5年度においても、国立大学協会から文部科学省に対して、インフラにかかるコスト増加分の補填を要求しているところである。直近の文部科学省からの説明によると、4月～8月分については予算措置の準備をしているところであるが、9月以降については未定とのことである。教育研究費を削りながら電気料金を出していくということになるのは非常に厳しいため、本学としても国立大学協会と連携して引き続き国への要望を行っていく。

△ 「社会的インパクト」についての評価が行われる予定となっているが、文部科学省においても検討中とのことである。論文数が多い、といったものではなく、社会的にどの程度の影響力があったか、といった評価になると考えられる。

○ 報告事項

1 社会変革研究センターの設置について

黒川理事から、資料3に基づき、第4期中期目標・中期計画にて令和5年度に設置することとしている社会変革研究センターについて、前倒しで令和5年1月1日に設置した旨の報告があった。

2 令和5年度予算の内示について

松田理事から、資料4に基づき、文部科学省における令和5年度国立大学関係予算案及び本学への令和4年度予算内示について報告があった。

☆ 就職・進学率については大変残念な順位なので、次年度以降は尽力していただきたい。

△ 昨年度の順位も良くなかったが、今年度もさらに落としてしまっており、重要な課題だと考えている。学部・研究科によって差異はあるものの、こういった要因や問題があるのかを精査しており、ある程度の予想を付けているところである。一つの例として、大学院の留学生が多い場合は就職前に帰国してしまっており帰国後の状況が分からず、結果として就職率が下がってしまうということなどが挙げられるが、要因はこれだけではないので、改善できることがないか引き続き精査をしていきたい。

○ その他

1 埼玉大学の最近の動向について

学長から、本学における最近の動向として、埼玉県高等学校長協会との高大対話の開催、大学入学共通テストの運営実施、本学への寄附者に対する紺綬褒章の伝達式の開催、埼大学生広報サポーターによるイベント開催等について報告があった。

続いて、石井研究科長から、資料5に基づき、埼玉大学における小中高校生向けの理数系教育の取組状況について報告があった。

☆ 高大接続の改革が推進されており、秋入試や総合型選抜といったものが5割を超えてきている。高校側としては、生徒を大学の色々な取組に参加させることによって、その大学に入学するための手立てにしたいと考えている。一度限りの入学試験での合否ではなく、生徒を大学に通わせてもらい、試験前に生徒のことを見極めてもらった上で総合型選抜の中で選んでもらう、といったことを目的として、高校は大学との連携協定を多数結んでいる。大学における小中高校生向けの理数系教育は、科学に対する意欲の醸成という面もあるが、大学が育てたいと思える生徒を見付けて、育てていくという仕組みにも繋がることを期待している。紹介のあった取組に参加した子供たちの中にも、埼玉大学への入学者がいると思われるので、入学前の指導内容が

大学での学びにどのように繋がっているのかの成果検証も検討していただきたい。

△ 「科学者の芽」の当初の段階では総合型選抜に結び付ける構想もあったが、実現せずに現状では行われていない。理学部では学校推薦による入試では、高校での研究活動としてSSH（スーパーサイエンスハイスクール）などを例に挙げて、そういった取組への参加経験のある生徒を入学させたい、という方針となっている。

☆ 小中高校生はデータサイエンスに非常に興味があり、文系も理系も関係なくデータサイエンスを学んで社会に出ていく仕組みが必要となってくるが、「科学者の芽」ではどう取り組まれているのか。

△ データサイエンスに特化はしていないが、セミナーや課題研究などは理工学研究科及び教育学部の教員から広く協力を募っており、その中には情報系の教員によるものもある、という状況である。

2 次回日程（令和5年3月16日（木））

坂井学長から、次回日程の開催時刻については、改めて各委員のご都合を伺いたい旨の連絡があった。

以上